

故郷に建てる三味線を楽しめる家

本條 秀太郎 三味線奏者・作曲家

子どもの頃から家に対する好みが少し変わっていたようで、土で作ったアフリカの家や韓国の韓屋のような、世界のさまざまな家を自宅の敷地内に集め、その日の気分や天気によって住み

頃に夢に描いていたような「遊び」のある生活は、今も大切にしています。最初に家を建てたときは、憧れだった船底天井の部屋をつくり、空間を楽しみながら生活していました。手



イラスト/松竹司

分けるという生活に憧れていました。三味線奏者になった今は、いかに三味線がいい音で聞こえるかということが家に求める最重要項目となりましたが、それでも子どもの

狭になったので三十年ほど前に今の場所に移ったのですが、船底天井はもう満喫したので、今度は漆喰の家にしようと、壁や天井を漆喰で塗ってもらいました。ただ、漆喰壁だと、しとっとした落

ち着きがなくなってしまう気がして、土壁の部屋もひと部屋残しました。「遊び心」を意識して、二階の自分の部屋にはロフトをつくりました。自宅にいるときはこのロフトにいたり、多いのですが、調べ物をしたり、新しい曲をつくったりするのには、この「隠れ家」のような空間がとても楽しく、気に入っています。部屋の中には本格的な茶室もつくったので、ロフトから下りると、外の庭にいるかのような錯覚に陥ります。

西洋の楽器は、雑音を極力排除して一番ピュアな音を求め、その音を重ねることで表現をします。それに対して三味線は、ひとつの音の中に空気の揺らぎや自然のいろいろなものが混じって表現され、単音で世界観を持つことができます。だからこそ、奏者の感性がより強く求められるのです。私の師匠は美術や季節の草花のこともよく教えてくれましたが、昔から一見ムダに思えることが文化を育ててきたのです。伝統文

化にはこうした「遊び」が必要なのだと私は思います。そこで、「みんなが遊びながら演奏を楽しめる場所」をつくりたいと、生まれ故郷の茨城県潮来市に土地を購入しました。右手に筑波山、左手に富士山が見える絶好の場所で、もうおおまかな図面も頭の中でできあがっています。

三味線は湿気に弱く、雨で濡れた服を着たお客様が入って来ただけで会場内の湿度が変わり、弦に影響してしまうのですが、そんな外の天気や帰りの心配をせず、みんなが集まって夜通し唄をつくったり、船遊びをしたり、美味しいものを食べながら、能の舞台で演奏される三味線を聴く。そんな「遊べる場所」で、奏者もお客様も自由に演奏を楽しめたら、どんなにいいでしょう。

土地はあって、図面もだいたいできていて、イメージは完璧、遊ぶ余裕も十分にあります。あとは、お金だけ。思いは叶うというので、いつか実現すると信じ、これからも思い続けます。